

桑島十和子

JOSHIBI no.199



後悔だけはしたくない。

だから現場では常に全力で。

Photo 鈴木陽介 Text 株式会社フリッジ
撮影協力 株式会社角川大映スタジオ



映画、CM、舞台、歌舞伎など、多彩なジャンルで美術監督を務めてきた桑島十和子さん。著名な監督たちから絶大な信頼を置かれる彼女は、世界的に高く評価される「PERFECT DAYS」を手がけたことでも知られます。順風満帆に映るこれまでを「ひとつひとつの作品に全力を注いできただけ」とふり返る彼女の出発点は、女子美で見つけたアルバイトだったといいます。

桑島十和子（くわじま・とわこ）

美術監督／美術デザイナー。女子美術短期大学造形科絵画教室（現・女子美術大学短期大学部造形学科美術コース）卒業。2009年、映画「パコと魔法の絵本」で第32回日本アカデミー賞最優秀美術賞受賞。2014年より女子美術大学短期大学部客員教授。[主な作品] 映画▷「下妻物語」「嫌われ松子の一生」「告白」「来る」（監督：中島哲也）「TOO YOUNG TO DIE! 若くして死ぬ」（監督：宮藤官九郎）「PERFECT DAYS」（監督：ヴィム・ヴェンダース）CM▷「サッポロ黒ラベル（大人エレベーター）」など多数。



「桑島さんはこの映画で何を担ったの？」

映画『PERFECT DAYS』を観た人からそんな風に言われたら「してやったり！」です。こちらの作爲を感じさせることなく、スクリーンの中の世界を自然に受け入れてもらえたという意味ですからね。もちろん作品によって関わり方は変わりますが、本作のようなドキュメンタリータッチの映画では、美術は語らず空気のような存在でありたい。そう思つて撮影に臨みました。

実際は、役所広司さんが演じる主人公、平山が住むアパートなら天井・壁・ドアは塗り替え、フロアリングは畳敷きに、ガラスは別の柄のものに入れ替えたりしています。細かいところでは、シーンによって落ち葉の向きを変えたり、背景に傘を1本だけ立てたりと、さまざまな趣向を凝らしています。映画をご覧になった方には驚かれますが、ほとんどのシーンに美術の手が入っているのです。それでも私は美術監督の存在は、基本的に印象に残らなくてもいいと思う。映画は基本的に監督のもので美術はあくまで裏方です。でも、とつてもやれることの幅が広くて奥が深い。だからこそこの仕事を続けて30年以上経った今も新鮮な気持ちでやれているのです。

私も女子美出身ですから、ご多分にもれず幼い頃から絵を描くことが好きでした。なかでも何かのお話など「お題」をもとに想像して描くのが好きだったんです。今となつて思えば、映画やCM、演劇など、お話がある作品に関与する美術監督の仕事にも通ずるものを感じます。その美術を初めて意識したのは中学生の頃です。そのころ映画が好きだった私は、役者さんではなく「役者さんの向こう側」を観るのが好きでした。これつて誰かが手がけているのだよな、と。映画にある「美術」というクレジット表記を目に「これかな」とは思うものの、具体的に何をしている人なのかも、どうやってなるのかもわからない。でも、絵を描き続けていればこの世界に近づけるはずだと、女子美の付属高校にいる頃から信じていました。ちなみに女子美を薦めてくれたのは母親です。世の中に美術が学べる学

校があると知ったのはこのとき。うちはごく普通のサラリーマン家庭で、美術やアートが身近だったわけではありません。親は、私の適正を見抜いて進学先を探してくれたのでしよう。期待と不安の両方を抱きながら入学して感じたのは、いい意味で「ユニークな子ばかりの学校」ということ。みんなそれぞれが自分の世界を持っていて、周囲もそれを尊重する。いろんな人を受け入れる寛容さがあるというか。中学では変に目立ちがちだった私が、高校では自然体でいられたのは女子美だったからこそです。ほかに印象に残っているのは、抜群に絵がうまい同級生から「とわちゃんの描く手の絵が一番だね」と褒められたこと。本当にうまい人から褒められたことがすごく嬉しかった。自信にもつながりました。

女子美の短大に進んだ1年目には、将来を意識して映像制作

に関係ありそうなアルバイトを始めました。でも見つかるのは、大道具の制作や写真スタジオなど、描く将来像とは近いようで遠いものばかり。けれど、ある日モヤモヤした気持ちで学内を歩いていると、アルバイト情報が貼り出される掲示板の一部が輝いて見えたのです。近づいてみると、これから撮影される映画の制作スタッフを募集する貼り紙でした。「これだ!」と思った私は、気づいたらキャンパス内に貼られた同貼り紙をすべて剥がして回っていました。このチャンス人を人に譲るまいと思ったのです(笑)。晴れて制作アシスタントとして働くことになると、仕事はお弁当の手配や交通整理などが中心でしたが、憧れの世界

に足を踏み入れた実感があり、とにかく楽しかった。何より師匠となる美術監督、寒竹恒雄さんと出会えたことで私の人生は大きく動き始めます。まだ何者でもない私の気持ちを受け止めて、自身の元でアルバイトをさせてくれたのです。そこからは美術の仕事を学ぶ日々がスタート。監督やスタッフとの打ち合わせでは、寒竹さんがどんなことを話しているのか、その内容をもとにどのような美術プランを作っていくのか。見よう見まねで必死に師匠についていきました。思えば学生にはなかなかハードな毎日で学業との両立もぎりぎりのライン。女子美のように、ものづくりへの理解がある学舎だったからこそ、この課外活





動も温かく見守っていただけたのでしよう。描く技術を鍛えられたことも、女子美で良かったことのひとつです。美術プランやイメージ画の作成にコンピュータを使う同業者も少なくない中、私は今でも手描きです。スタッフなどに「桑島さんの絵は分かります」と言ってもらえることも少なくありません。映画、CM、舞台などで幅広く仕事をさせてもらっている根底には女子美で身につけた「描く力」がある。そのことだけは間違いありません。

短大卒業後はそのまま寒竹さんのもとで働き、25歳で美術監督としてデビュー。助手だった頃からお世話になっている中島哲也監督とは、その後20年以上に渡ってお仕事をさせていただいています。中島監督の映画を見た劇団 大人計画の方から演劇畑の仕事に誘われ、それに関わっていた宮藤官九郎さんから自身が監

督する映画の美術を任されると、振り返ってみれば本当にいろんなご縁に恵まれてきました。「PERFECT DAYS」で、現代映画界の巨匠であるヴィム・ヴェンダースと仕事ができ

たのも、これまでのご縁がきっかけです。宮藤官九郎さんは、お化け屋敷の舞台で使う女性の髪の毛を、ひとり夜なべしてクシですく私の姿を見て「この人なら一生懸命に仕事してくれるだろう」と思われたそうです。そんなふうに、目の前の仕事ひとつひとつに全力を注いでいることを誰かが見てくれていて、次の仕事につながる。その連続で今の私があるのだと

思っています。

結果として、実にさまざまなものを作ってきましたが、これも美術の仕事の魅力です。たとえば、宇宙船、公園、時代劇のセットなど。世の中に存在するものから、ないものまで監督たちの求めに応じて本当にいろいろなものを形にしました。それは、ともに働く仲間の存在があつてはじめて実現できることです。美術制作のスタッフだけで数10〜100名程度が関わる上に、実際の撮影現場では撮影部や照明部などとの調整も行われます。現場によってはセットを建てるための重機まで入り、にぎやか

さを通り越して工事現場さながら。でも、私はその雰囲気が好き。みんなで協力しながら作品を完成させていく、ワクワクとどきどきは何度経験しても飽きることがありません。何歳まで続けられるかはわかりませんが、私に「お題」をくれる方がいる限り、私のことを必要とする方がいる限り、現場に立ち続けられたらと願っています。

いつも意識しているのは「後悔しないように全力で」ということ。ありがたいことに、これまでいくつもの仕事で大きな賞をいただきましたが、私にとってそれらはあくまで一生懸命

やった結果にすぎません。撮影中はどうやったらずらに作品に必要な世界観を美術で実現できるか、「100点超えの画面」を作り出せるか、常に必死で考えを巡らせるのみ。そうしてでき上がった作品を目にした観客や視聴者のみなさんが笑ってくれたり、泣いてくれたり、何かを感じてくれたら、それ以上に嬉しいことはありません。やっぱり自分の満足のために携わっているわけではありませんからね。普段は目の前の仕事のことで精一杯だけど、周囲からうれしい反応があつて初めて「ああ、やって良かったな」って感じるお仕事なんですよ。



映画「PERFECT DAYS」 ©2023 MASTER MIND Ltd.



令和四年 平成中村座 十月、十一月大歌舞伎
「唐茄子屋 不思議國之若旦那」 製作:松竹



映画「パコと魔法の絵本」
©映画「パコと魔法の絵本」製作委員会

杉並・相模原キャンパスの環境整備

本学では、2025年の創立125周年に向けて、杉並・相模原キャンパスの環境整備に取り組んでいます。
今回は、相模原キャンパスの8号館別棟の増築についてお知らせいたします。



相模原キャンパス
8号館別棟の増築

洋画専攻の2コース（絵画・版画）と日本画専攻の工房や教室がある8号館近くに、紙漉き工房を移設しました。洋の東西を問わず、絵画の基底材として長い歴史を持つ紙漉きの基本的な技法から、本学の教育知見を基にした女子美ならではの紙漉き技術指導まで、紙漉きの可能性を示すことで、創造の核として学生に愛される工房を目指します。

学位・修了証書授与式と入学式が行われました



3月12日、令和5年度大学院・芸術学部・短期大学の学位・修了証書授与式と、4月5日、令和6年度大学院・芸術学部・短期大学の入学式が、杉並キャンパス・相模原キャンパスの体育館にてそれぞれ執り行われました。また、保護者の皆様に対し、式の模様はYouTubeに

てライブ配信を行いました。今年度、女子美は大学院美術研究科50名、芸術学部707名（編入含む）、短期大学部173名（専攻科含む）、計964名の新入生を迎えることができました。

訃報 ここに謹んで哀悼の意を表します

本学元学長・名誉教授 柚木沙弥郎

1922年東京生まれ。1942年、東京大学入学。1946年、大原美術館に勤務。1947年から芹沢銈介に師事。1950年に女子美術大学工芸科の専任講師となり、1972年に教授に就任。1987年から1991年まで女子美術大学・女子美術短期大学学長を務める。主な展覧会に、2014年 フランス・パリ 国立ギメ東洋美術館「La Danse des formes 柚木沙弥郎」展、2022年 女子美アートミュージアム「柚木沙弥郎の100年 -創造の軌跡-」展、2023年 日本民藝館にて「生誕100年柚木沙弥郎」展がある。1958年 ブリュッセル万国博覧会銅賞、1991年 第一回宮沢賢治賞、2022年 毎日デザイン賞など受賞歴多数。

本学名誉博士 ジュリアーノ・ヴァンジ

1931年にイタリアで生まれ、フィレンツェ国立美術学校を卒業。1988年に日本で初めての個展を東京で開催。2002年にはヴァンジ彫刻庭園美術館が静岡県に開館（2023年閉館）。同年、彫刻部門で高松宮殿下記念世界文化賞受賞。その他、1995年ドナッテロ賞、1996年ミケランジェロ賞、1996年アカデミアディリンチェイ賞など多数。フィレンツェの「洗礼者ヨハネ像」、シエナバスティエルラ広場「雌オオカミ像」などを制作。2001年女子美術大学客員教授就任。2011年女子美術大学名誉博士称号授与。

MESSAGE

新入生に向けて

01



学校法人女子美術大学
理事長 福下 雄二

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。心からお慶びと歓迎を申し上げます。
本学は、来年2025年には創立125周年を迎える、私立の美術大学としては最も古い歴史と伝統を誇る大学であり、創立以来「芸術による女性の自立」という建学の精神の下、女性のための美術教育にまい進し、あらゆる世界で活躍する数多くの卒業生を輩出してまいりました。
これからは、皆様の新しい力によって一層輝かしい歴史と伝統を築き上げていっていただくことを期待しております。
皆様は、これから、それぞれの学科や専攻領域において研鑽を積み、専門の知識や技能を学ばれ、感性を磨き、芸術を創造していく力を身につけられることと思います。同時に、これからの学生生活では、良き先生に巡り会い、良い友人に恵まれるよう努力していただき、充実した実り多い学生生活を送っていただきたいと思います。



女子美術大学
女子美術大学短期大学部
学長 小倉 文子

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。1900年に創立した女子美は、芸術による女性の自立、女性の社会的地位の向上、専門の技術家・美術教師の養成を建学の精神として創立し、来年、2025年には創立125周年を迎えます。これまでに多くのアーティストやクリエイターを輩出すると同時に、起業する卒業生も多く、職種も多岐にわたります。考える力、生きる力を身に付け活躍の場を広げた結果といえます。
学生生活は学科専攻領域を越えて自由に参加できる産官学連携プロジェクトや異分野と協働で行うプロジェクトが多数あります。また、海外で行うインターシップや留学制度なども充実しています。行動することでたくさんの方と出会い、たくさんの方とつながります。正課授業で習得する知識や技術に加え、正課外のプロジェクトに参加することで出会うモノやコトを最大限活用し、社会とつながり、学科を越えた仲間たちとともに体験を通して成果を上げられることを期待しています。



短期大学部部長
佐藤 真澄



芸術学部部長
清水 美三子



大学院美術研究科長
奥山 亜喜子



副学長
後藤 浩介



副学長
松本 博子

織原千絵 Chie Orihara
芸術学部 共創デザイン学科 特命教授



株式会社東芝 コンセプトエンジニアリング開発部に入社、都市開発やシステム提案に従事。同社デザインセンターへ転籍後は新規事業開発に携わり、その活動の中から独自の発想手法「Idea Wall Map®」を創出。デジタル版を開発しナレッジシステムとして展開。新規事業検討、将来ビジョン策定、共創活動など社内外で活用。

石川康子 Yasuko Ishikawa
芸術学部 共創デザイン学科 准教授



国内大手メーカーにて6年間プロダクト・UXデザインを担当後、新規事業部へ異動し、社内新規事業創出システム・社内有志コミュニティの立ち上げを行った。経済産業省主催「始動 Next Innovator」プログラムのシリコンバレー派遣選抜1期生。2017年よりデュッセルドルフにて日本発スタートアップの海外進出を支援。国内外のデザイン賞、広告賞受賞多数。

平賀愛子 Aiko Hiraga
短期大学部 造形学科 デザインコース 特任准教授



国内大手照明メーカーにて13年間、住宅照明器具やLEDランプ等のプロダクトデザインを行う。育児休暇中に訪れたアメリカで自由な発想と粘土の可塑性に惹かれ、陶芸の道に入る。現在はプロダクトデザインの経験を活かした、型を用いた作品を主に制作している。グッドデザイン賞、美濃国際陶磁器展、東北伝統工芸展入選など他多数。

瀬田ユミ Yumi Seta
女子美術大学研究所 講師（研究）



1985年神奈川県生まれ。女子美術大学 芸術学科卒業。2010年よりアート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域助手に従事。任期満了後、2016年より東京・原宿にあるコンテンポラリーアートギャラリーThe Massの立ち上げに参加し、国内外の様々なアーティストの展示を多数企画、運営。

皆さん、高校時代は同じ価値観を共有する友人と過ごすことが多かったかもしれませんが。しかし大学生・社会人と進むにつれ、様々な価値観を持つ人、立場・背景の異なる人との交流が増えていきます。当然、意見・考え方が違うことも多いでしょう。でもその「違い」があるからこそ発見があり、新しい可能性へ導いてくれます。「違い」を楽しみながら様々な課題に取り組んで下さい。『人間が想像できることは、いずれ実現できる』と言われています。皆さんも大いに想像を膨らませ、様々な人と協力し工夫を重ねて実現へ向かってください。ただし「時間を巻き戻す」ことに関しては、まだ実現の目途がたっていません。そして時間はあっという間に過ぎていきます。是非「学生」という様々なことに挑戦できる貴重な時間を、どん欲に過ごしてください。

今から十年以内に、汎用人工知能は全人類の叡智の十倍を超えると言われています。その時私たち人間に求められるものは何でしょうか？ 私は善き意志の発揮と行動力、そして信頼関係の構築力だと考えます。皆さんは、「女性」であるというだけでたくさんの問題に恵まれています。問題こそ、社会を良くしていくための最も根源的な出発点です。これから直面する様々な問題をチャンスと捉え、乗り越えていくことを楽しんでください。皆さんが苦勞を乗り越え、善き意志を発揮して行動する時、AIは強力な支援者となり、信頼で繋がる応援者が社会に散らばったチャンスのカケラに橋を渡すでしょう。これから皆さんと様々な面でご一緒できることを楽しみにしております。キャンパスで見かけたら、ぜひお気軽にお声がけください。どうぞ宜しくお願いします。

学生という自由な時間があるうちに、自分が「気になる」ことを掘り下げて欲しいと思います。私自身の反省として、時代や環境・社会的な価値観に影響されて長い間、心の声をないがしろにしてきました。時を経て自分の中に残ったものは意外と、時代や流行に関係ない私事の関心・感動だったりします。友人と同じゲームや漫画が好きでも、好きなポイントは完全には一致しませんよね。好きなものや嫌悪感を感じるもの、何故そう思うのか？ 玉ねぎの薄皮を1枚1枚はいでいくような感覚で自分の中心軸みたいなものが分かると、意識も変わり世界の見え方も変わります。変化の激しい社会に出て自分を取り戻す機会を与えてくれるはずです。ワクワクする気持ちを大事に、楽しく自分発掘作業をしてみてください。

様々なものや人との出逢い方、夢の描き方、そして女子美術大学という場所で学ぶこと。目の前にある現実や経験を訪いでいく手段は皆さんそれぞれでしか実現することのできない唯一無二の強さだと思います。これから大学生活を過ごしていく中で様々な知識を得て、多くの人に出会い、助けられ、自分が何者であるのかを問う瞬間が波のように訪れては去りを繰り返していくはずです。大学という箱の中だけではなく、今でしか見ることのできない外の景色に目を向け、まだ知ることのない場所へ赴く経験は自らを俯瞰し立ち返る機会を与えてくれます。限られた大学生活の中に溢れるたくさんのチャンスを掴みながら、経験や目に映る多くを活かす術を皆さんと一緒に見つけ、形にしていく方法を問いながら共に学んでいきたいと思っています。

芸術学部	美術学科	日本画専攻	特任教授	村岡貴美男
芸術学部	美術学科	立体アート専攻	教授	平戸貢児
芸術学部	アート・デザイン表現学科	メディア表現領域	教授	浅野正博
芸術学部	アート・デザイン表現学科	メディア表現領域	教授	内山博子

MESSAGE

新任教員からみなさんへ

栗田大輔 Daisuke Awata
芸術学部 共通専門 准教授（教育・研究）



東京生まれ。2005年に「第13回『美術手帖』芸術評論募集」で佳作を受賞。在野で美術批評に従事。アート専門のインターネット放送局[comos-tv]の運営メンバー。日本美術オール・ヒストリー・アーカイブのメンバー。『中原佑介美術批評選集』編集委員。書籍や雑誌、Webメディアなどで論考を多数執筆。

藤田百合 Yuri Fujita
芸術学部 共通専門 准教授（教育・研究）



女子美術大学大学院修士課程美術史専攻修了。ブリヂストン美術館（現アーティゾン美術館）と国立西洋美術館の教育普及インターン、東京国立近代美術館・教育普及室研究補佐員、その後、女子美術大学美術館学芸員（主な担当企画に「柿内青葉展」「JAMのABC展鑑賞のプラクティス」）、東京国立近代美術館・教育普及室特定研究員を経て現職。

齊藤全人 Mahito Saito
芸術学部 共通専門 特任准教授



東京生まれ。宮内庁三の丸尚蔵館（現・皇居三の丸尚蔵館）にて13年間学芸員として勤務した後、たましん美術館美術資料室長を経て現職。過去に担当した企画展としては「三条実美と岩倉具視：一代絵巻が物語る幕末維新」「榎田丹陵：時代を描いたやまと絵師」など。専門は日本絵画史（近世～近代）。

山本桂輔 Keisuke Yamamoto
芸術学部 美術学科 立体アート専攻 特任准教授



東京生まれ。美術家。東京造形大学彫刻専攻卒業、東京藝術大学大学院彫刻専攻修了。東北芸術工科大学専任講師を経て現職。主な展覧会に、「ウィンター・ガーデン：日本現代美術におけるマイクロポップ的想像力の展開」（2009年、原美術館）、「Twist and Shout: Contemporary Art from Japan」（2009年、バンコク）などがある。その他、小山登美夫ギャラリーを拠点に、国内外で個展・グループ展多数。国立国際美術館や国際交流基金などに収蔵。

檀上誠 Makoto Danjo
芸術学部 アート・デザイン表現学科 メディア表現領域 教授



慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科修了（メディアデザイン学） 民間企業でゲーム用ムービー・TV番組オープニング・TVCM・大型展示・車両走行シミュレーションなどの映像制作に3DCGデザイナーやCGディレクターとして携わる。主な研究分野はCGデザインで、CGを活用したコンテンツ制作・研究を行っている。Innovation Circus Milan 2010 ICT track 第1位 などを受賞。

みなさん、こんにちは。わたしは現代アートの理論研究や美術批評をしています。現代アートや批評と聞いて、もしかしたら「難しい」と距離を感じるひともいるかもしれませんが、現代アートは「contemporary art（同時代の美術）」ともいうように、同時代の出来事や問題についてアーティストやキュレーター、研究者、批評家、観客、学生などさまざまな立場の人々が共に考えていく場＝プラットフォームです。また「過去があって今の状況がある」ように、歴史的なことや社会通念、規範を問い直すことで人々の意識（未来）を変えていく場でもあります。目の前にある当たり前を疑うこと――批評という営みは批評家だけのものではありません。批評的な思考や現代アートの実践を「常識にとらわれずに」共に育んでいきましょう。

専門は博物館教育です。女子美術大学美術館の教育普及も担当しています。「美術館と人」「作品と人」をつなぐだけでなく、美術館や作品を通して、人と人をつなぐきっかけとなるコトを生み出したいと思っています。これまで、鑑賞者が自分のペースで主体的に作品に親しみ、作品をより楽しくみるためのツール（鑑賞補助教材）を制作してきました。ツールは作品鑑賞を手助けするもので、作品と鑑賞者の「つなぎ手」の役割を担っています。実技と美術史を学んだ経験を活かして、これからも「つくること」と「みること」をむすびつける教育普及プログラムを考えていくつもりです。女子美術大学美術館が地域に根付き、学生はもとより地域の方々の身近な場所となるように、美術館のコレクションを糸口にした、「美大の強みを活かしたコトやツール」を一緒につくっていきましょう。

美大で教えるのは初めての経験なので、とてもワクワクしています。私は日本美術史という先人が残した作品を調査・研究する学問を専門とし、また学芸員として過去から託された作品をさらに後世へと受け継ぐ重要性を認識しながらこれまでやってきました。私のモチベーションの根底には時代を問わず、表現する人・創作する人へのリスペクトがあります。その想いは美大に入学したみなさんに対しても同じです。つまり、みなさん一人一人を表現者・創作者とみなして授業を行うつもりです。何百年も前に生み出された作品をつぶさに観察すれば、きっと今の創作のヒントになるものがたくさん見つかるはずです。私もみなさんからこれまでと違った作品の見方を学べるのではないかと、期待しています。

残念ながら人間は鳥のように空を飛べないし、魚のように海に潜り続ける事もできないし、普段の生活の中でも思ったように事が進まないなんていつもの事です。世界で起きている大きな問題に、途方に暮れてしまったりもします。美術って、そんな世界(社会)の不自由さ、自分の無力さの中でも塞ぎこまず、自分なりに体と頭を使って、自由を手にいれようとする行為といえるかもしれません。自分と世界の間で、何かを見つけ、立ち上げていく。どれほどの効力があるのかは分からないけれど、まずは自分事として世界と向き合う事が大切な気がします。きっとそれは、自分の人生を歩くという事ともつながってくると思うので。世界は思うよりも不自由で自由です。そして知っているかもしれませんが、結構楽しいものです。

「それって楽しいの?」と問いかけた私に対して、「うん。楽しいよ!」と妻が笑顔で答えてくれたことがあります。これは趣味でインク作りをしている妻がインクの発色具合を確かめるため、普通紙にシンプルな絵や文字を描いている時の会話です。妻の笑顔を目の当たりにした瞬間、「ああ、アートやデザインは人生に潤いを与えてくれるのだな」と考えさせられました。昨今、不安定な世界情勢の下、皆さんは自分の将来を思い描く際に、不安に駆られることがあるかもしれません。ですが、アートやデザインを通じて学んだ知識や経験は将来の働き方に活かされるだけではなく、自分の生き方に潤いをもたらしてくれます。女子美でアートやデザインに関連する過去から未来を見据えた学びを体感しながら、自分自身の人生に潤いがもたらされる瞬間を実感してほしいです。

Q 5

制作する上で大切にしていることを教えてください。

建築の仕事は規模が大きいので、チーム作業です。学生のときは、自分の考えをどのように発表するか、何が面白いのか考えていました。今は自分の考えを持ちつつ、チームの1人として何ができるか、どうすればプロジェクトが円滑に面白く進むか、ということを考えています。

Q 6

海外で活動することの楽しさとは？

働き生活することを通して自分の考えが広がることです。日本では常識だと思っていたことがそうではなく、単に1つのやり方に過ぎなかったと気づかされます。また新しい価値観を知り、今まで見えなかった日本のいいところも見えてくることで、自分のアイデンティティ、意見やものの見方が変わることだと思います。

Q 7

大学時代にやっておくべきことについてアドバイスをお願いします。

友達と行きたいところや観たいものをみたり、一緒に美味しいものを食べたりたくさん話をしたり。たくさんの自分のための時間がある今だからできることを、ぜひ楽しんでほしいと思います。もちろん遊びだけではなく、たとえば課題にそのとき持っている自分のエネルギーを200%注いでみる。一生懸命に、がむしゃらに。結果は置いておいて、何かをやり切った感覚はいつか宝物になるはずです。

Q 8

やりたいこと、夢を実現するためのヒントを教えてください。

あまり将来を不安視せずに、目の前のことを一生懸命やってみると次につながるような気がします。また、できない理由はたくさんあったとしても、小さな興味を試してみたり、とにかくやってみる。そうすると、始める前には想像できなかったような発見があるかもしれません。遠回りしているようでも、後から考えるとそれもそれで正解だったと思えたりします。私もずっと試行錯誤中です。

Q 9

女子美生にメッセージをお願いします。

学生生活は人生の中では短い時間ですが、あの時は……と、いつも振り返るような、大きな意味を持つ時間だと思います。女子美には変な人も面白い人も、個性の強い、キャラクターの濃い人がたくさんいます。お互いに刺激を受け、やりたいことを思いっきりやり、その中で自分なりにいいところを見つけてその環境と時間を楽しんでほしいと思います。



ZAC スイス スクール グラウビュンデン州 災害救助トレーニングセンター
共同設計 atelier tau GmbH + Tao Architects Office GmbH + bersa inc.
竣工予定 2027年



アトリエの様子



アトリエの様子



土屋 紘奈 (つちや・ひろな)

建築家。2012年女子美術大学デザイン学科環境デザインコース卒業。同年、卒業制作賞受賞。大学卒業後、中山英之建築設計事務所(日本)を経て、Angela Deuber Architects(スイス)勤務。現在は独立しatelier tsu共同設立、日本、スイスにて住宅、店舗、公共施設等の設計活動を行う。2023年SD Reviewにて福岡の住宅、Hause on the Borderが入選。現在、Chur(スイス)にて設計チームと共に災害救助トレーニングセンターを設計中、2027年の竣工を目指している。

土屋 紘奈

SWITZERLAND

卒業後の舞台は世界。海外で活躍する卒業生に聞く、貴重な経験や夢を叶えるためのヒント。今回は、スイスの地で住宅や店舗、公共施設などの設計を手がける建築家の土屋紘奈さんにお答えいただきました。

Q 1

海外で活動するようになったきっかけは？

以前から海外に興味を持ってはいましたが、学生の頃は英語が苦手で、海外で働くなんて無理だと思っていました。大学卒業後は日本で働いていましたが、当時、パートナーがスイスで働くことになり、1年だけの滞在予定だったこともあり軽い気持ちで一緒に行ってみました。スイスで生活するうち、私もここで仕事してみようかなと思ったのが活動のきっかけですが、興味があっても不安の方が大きかったです。それから10年ほどスイスにいますが、働くことと生活することの良いバランスをとれていることが、今もスイスで仕事をしている理由かもしれません。

Q 2

美大の中で女子美を選んだのはなぜですか？

附属のときからの大好きな友達と大学生活を送ることが楽しかったです。今振り返って考える女子美のいいところは、女性だけの美術学校という特異な環境で、好きなことに思いっきりエネルギーを注げること、そのための自由な表現ができるところだと思っています。その個人的な"好き"な気持ちの深いところで社会とつながることができると思っています。

Q 3

女子美時代はどんな学生でしたか？

女子美には附属から通っていましたが、高校時代はあまり優秀な生徒ではありませんでした。大学入学時は将来やりたいことがまだよくわからなかったため、2年生から各専門分野に分かれるデザイン学科(当時)へ入学しました。1年生の間は車の免許を取ったりアルバイトをしたり、友達と旅行へ行ったり、といったようなことに興味がありましたが、2年生で専門分野に分かれた後、建築や空間デザインが楽しいと感じ、とにかく真剣に1つ1つの課題に向き合いました。

Q 4

女子美時代の、特に印象深い思い出は？

すごく何気ない日常のシーンを思い出します。学食で友達とずっと話をしたり、テスト勉強をしたり、春に校庭の桜の木の下でごはんを食べたり。時間があるときは、研究室にあった建築雑誌のバックナンバーを読んだり、図書館に本を探したり行ったりもしました。友達とそこで時間を過ごしたり、1人で過ごすこともありました。



House on the Border
共同設計 株式会社社会設計事務所一級建築士事務所
2023年 SDレビュー入選

企業で働く、 そんな未来。

Vol.05



TRANSFORMERS and all related characters are trademarks of Hasbro and are used with permission.
© 2024 Hasbro. All Rights Reserved. Licensed by Hasbro.
© TOMY「トランスフォーマー」、[TRANSFORMERS]は株式会社タカラトミーの登録商標です。

学生時代につぎ込んだ「好き」と 「経験」が、仕事を支えている。

株式会社 壽屋 企画本部 企画グループ 森川由莉子さん
芸術学部 立体アート学科（現 美術学科 立体アート専攻）
2012年3月卒業

節句人形と玩具を扱う小売店を原点とし、現在はフィギュア・プラモデルの製造・販売・小売を中心とした事業を展開するホビーマーカー「株式会社 壽屋」。今回は、壽屋でフィギュアの企画や業務マネジメントなどを担当されている、卒業生の森川由莉子さんに大学時代の思い出や就職活動について、お仕事のことなどを伺いました。



株式会社 壽屋

フィギュア、プラモデルをはじめ、雑貨製品やオリジナルIP開発、近年はVR/AR等を活用したデジタル領域にも進出するなど、エンターテインメント分野において広く存在感を示すホビーマーカー。ライセンス取得から企画立案、製品開発、製造管理、販売までを一貫で行う「製販一体型」のビジネスモデルも特徴です。
<https://www.kotobukiya.co.jp>

若いうちはたくさん買い物しよう。

中学生の頃から映画が好きになり、なかでもSFホラー映画やモンスター映画を好んでよく観ていました。同時に映画のメイキング本も読むようになったのですが、そこで映画に出てくるモンスターのモデリングの仕事を知り、立体造形の分野を学びたくて女子美に進学しました。

大学時代は課題に真摯に向き合う一方で、アルバイトもがんばりました。喫茶店と居酒屋を掛けもちして、週4日くらいのペースで働いていましたね。接客経験やお酒の席での振る舞い、お酒の知識などは社会人になってからもすごく役に立っています。アルバイト代は課題の制作費とおもちゃ（好きな映画の！）とファッションにつぎ込んでいたのですが、どれも今の仕事に生きています。自分のことを振り返っても、若いうちはお金を貯金するより好きなことに使った方がいいと思うんです。働いていて思うのは、今は当時よりお金はあるけど、体力が少ないです（笑）。学生時代は「この監督がすごいから全作品観よう」とか、1日4〜5本くらい映画を観ていたりもしましたが、今もそれができるかといったら、難しいですね。また、学生時代の1万円の価値と社会人になってからの1万円の価値の違いも痛感しています。学生時代、1万円を大事にとっておくよりも、それを使っているようなものを買ったり経験したりすることで、それが思い出となり肥やしとなり、社会人になった時にきつと生きてきます。私はたくさん買い物して貯金はゼロでしたが、よかったなって個人的には思っています。

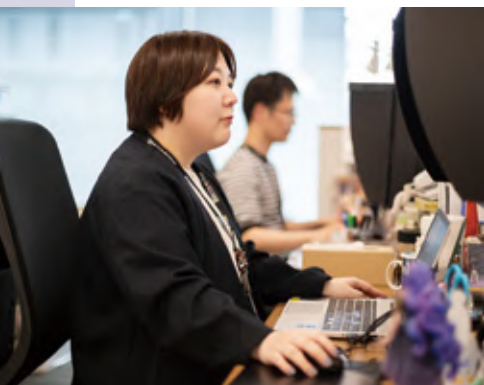
課題でも就職活動でも
「なぜ？」を突き詰めて。

就職活動は大学2年生の夏頃から始めました。仕事の時間って、1日の3分の1くらいを占めることになりましたから、好きなことや興味のあること、あまり苦に思わないことを仕事にしたい、というのは前提として考えていました。映画業界にも入学当時は興味がありましたが、ハードワークに身を捧げるよりはライフワークバランスを考えて企業にシフトし、「立体物」に関わる仕事という軸で、好きな玩具業界を中心に受けていましたね。

就職活動の時に特に力を入れてやっていたのが、いわゆる自己分析です。「自分の興味があるもの、好きなもの」に対して「なぜそう思うのか」ということを突き詰めて、掘り下げました。自問自答を通じて自分の考えを言語化することは、仕事をしている今でも必要なスキルだと実感しています。これは就職活動に限ったことではなく、たとえば課題の時に「なぜこの形にするのか？」というのはよく考えていました。単に「見た目がカッコいいから」で終わるのではなく、何か意味を持たせたいとよく考えていました。

独りよがりにならないように。

壽屋には新卒入社で12年目になります。入社後、秋葉原にある店舗で3ヶ月間の研修をしたあとは、ずっと企画職でやらせてもらっている。



採用担当者の声

やり抜く力、諦めない心を。

総務人事グループ 人事チーム 鳥飼恭子さん

壽屋は創業71年と歴史の古い会社ですが、変化を恐れず、挑戦心を持って変わり続けていくことを大切にしています。女子美出身の方は森川をはじめ他にも在籍していますが、共通しているのが努力家であることです。人それぞれ、時代によっても違いますが、弱音を吐かずに前に進んでいく方が多い。女性だけの大学だからこそ、一人ひとりがリーダーシップをとっていくことが身につけているのだと思います。

美術大学出身の方は、大学で学んだ技術や知識・経験を事業会社でどのように汎用できるかを語り、ご自身の将来像や能力発揮についてプレゼンができるといいですね。その基礎にあるのが人間力だと思っています。森川は、実は、学生時代に箱根の駅前で焼き鳥屋台をひとりで切り盛りしていたというエピソードが印象的で、採用の大きな理由にもなっています。え？すごくない？って（笑）。ガッツと経験は社会人に求められる普遍的な要素かもしれません。やり抜く力、諦めない心。これはどの企業も、本質的には見ていらっしゃるのではと個人的には思っています。スキルは社会に出てからも磨くことができます。そういう意味で、アルバイトに一生懸命取り組むといった経験も大切だと思います。学生時代のさまざまな経験が、あなたの世界を少しずつ広げてくれるはずですよ。

キャラクターの唯一のフィギュアにもなり得ますから、変にオタク心を出し過ぎて、自分の趣味に走ったニッチな姿を商品化するようなことは避けたい。特にBISHOUJOシリーズは、もともとの作品が好きな方で美少女化なんて認めたくない、という方もいらっしゃると思います。それから、しっかりと意味づけ、理由づけを行って、納得してもらえ人ができるだけ多くなる姿にできるように心がけています。

自分の「好き」を大切に。

企画職は、自分が実際に手を動かして作るというよりは、版元様や原型師といった方々とやりとりをしながら、商品を作り上げていく仕事です。しっかりとビジョンを持って、時にはぶ

つかり合いながらも、作品や作り手に愛とリスベクトを持って仕事をするということは、すごく大切にしています。

壽屋に入社してから、憧れの作品であったり「この作品に関わりた」と思っていた夢はすべて叶ってしまいました。それも、自分がやりたいと思うことに挑戦させてもらえる環境があつてこそだと思います。これは女子美もそうでしたが、オタク系趣味を気兼ねなくオープンにできるのもこの会社のいいところかもしれません。

皆さんも、自分の「好き」を大切に、たくさん好きなものを学生時代に見つけてください。好きなものが直接仕事にならなくても、辛いことがあった時に支えになってくれることもあります。好きなものがある人生は、豊かだし、楽しいものです。

共創デザイン学科 1期生授業成果展

3月9・10日の2日間にわたって、共創デザイン学科 1期生授業成果展を開催。授業作品や産官学連携プロジェクト、学外コンテストの結果報告が展示され、学生自ら展示内容の紹介を行うことで、共創デザイン学科で学んできた1年間の成果を披露する場となりました。来場者の方からは、「幅広い分野の授業があつて驚いた」「提案の質がとても高い」など様々な感想をいただきました。



産学連携企画 『はねうまいノベーションカレッジ』にて 優勝



新潟県妙高市の地域活性化をテーマに行われた『はねうまいノベーションカレッジ』(NPO法人「はねうまネットワーク」主催)に「産官学連携演習」の授業で共創デザイン学科の学生が参加。上越の問伐問題をテーマにした新のイベント「妙高薪祭り」を企画し、見事1位を獲得しました。後日、妙高市役所を訪問し、市長や役職者に向けプレゼンテーションを実施。提案の概要や収支計画などを説明する中で、イベントを通して森林整備や担い手の確保、SDGsの教育といった、妙高市の課題をサポートできることをアピールし、高評を得ました。

『学生ビジネスプランコンテスト 「JUMP」』にて 「JA全農賞」を受賞

社会課題の解決を目指す若手実業家の育成に取り組む全国規模のピッチコンテスト『学生ビジネスプランコンテスト「JUMP」』に「ビジネスデザイン概論」の授業で共創デザイン学科の学生チームがエントリー。貧困で満足な食生活を送れない子どもたちに、一方的な支援ではなく子どもたちも参加する食支援の仕組みを考案し、「どんぐりっこプロジェクト」と名づけて発表。全126件中、11件のファイナリストに選出され、見事「JA全農賞」を受賞しました。



デザインシンキング講座

デザインシンキングの型を体験する5日間

トリプルデザイン株式会社の三上龍之先生によるデザインシンキング講座では、グループで様々なワークを実践しながら、多様な領域の人々と共に新しい価値を創り出す思考法「デザインシンキング」の型を体験。課題発見から解決までの一連の流れを5日間の講座でご指導いただきました。



食講座

働く女性のための「ブレない心」をつくる栄養学

分子栄養学・薬膳講師の鹿沼聡美先生による食講座では、「働く女性のための「ブレない心」をつくる栄養学」をテーマに、社会で活躍するための心と身体のための土台を作ることを目的とした食育の知識をご指導いただきました。また鹿沼先生推薦のランチと共に、受講者同士の交流を目的としたネットワーキングサロンも実施されました。



睡眠講座

快適睡眠術～新しい時代を私らしく生きる～

快眠セラピスト・睡眠環境プランナーの三橋美穂先生による睡眠講座では、「快適睡眠術～新しい時代を私らしく生きる～」をテーマに、良い睡眠とは何か、睡眠の質を高める具体的な方法、これからの新しい時代を生き抜くための快眠についてご指導いただきました。

共創デザイン学科 レジリエンスキャリアプログラム®

共創デザイン学科は、自身の強みとなるスキル教育に加え、折れない心やキャリアを高めるための教育にも力をいれています。学生のみならず、すでに社会で荒波に揉まれながら頑張る全ての女性たちを支援したいと考え、社会人女性のための短期間の集中プログラム「レジリエンスキャリアアッププログラム®」を夏期と春期に実施しております。

本学が映画
『ブルーピリオド』の
撮影地になりました



〈外部リンク〉
映画『ブルーピリオド』
公式サイト
[https://www.warnerbros.co.jp/
blueperiod-moviejp/](https://www.warnerbros.co.jp/blueperiod-moviejp/)



2024年8月9日公開の映画『ブルーピリオド』の一部シーンにて、本学杉並キャンパスおよび付属高等学校・中学校が撮影地として使用されました。「マンガ大賞2020」を受賞した山口つばさ原作の『ブルーピリオド』（講談社「月刊アフタヌーン」連載）がついに実写映画化。空気を読んで流れに身を任せて生きてきた高校生・矢口八虎が、1枚の絵をきっかけに美術の世界にのめりこみ、才能あふれるライバル達と切磋琢磨しながら国内最難関の美術大学合格を目指す青春群像劇。好きなことに真剣に向き合う主人公の挑戦に、胸が熱くなる感動の物語となっています。ぜひ映画館にてご覧いただき、登場シーンを探してみてください。

NEWS — & — TOPICS



02 上海交通大学の先生方による中国画特別講習会を開催

本学と上海交通大学は、2013年より国際文化交流のさらなる発展を目指し、中日芸術文化交流のプラットフォームとして芸術文化交流を頻繁に行ってきました。2019年度以降、新型コロナウイルス感染拡大により交流活動の一時中断を余儀なくされましたが、今年度より5年ぶりに交流活動を再開することとなりました。去る5月29日、本学の特別招聘教授で、上海交通大学及び上海交通大学海派文化研究所の先

生方による本学学生対象の中国画特別講習会を開催。詹 仁左先生には「花鳥風月画」を、吳 一平先生には「山水画」の様々な技法を、実演を交え一人ひとり丁寧に指導いただきました。講習会の最後には、先生のお手本を参考にし、全員が素晴らしい中国画の作品を見事に完成させました。



4月26日（金）に相模原キャンパスにて、国立印刷局のセキュリティ印刷における工芸官の超絶技巧を学ぶ特別講義が行われました。

現在、国立印刷局が製造する日本銀行券などの原版は、工芸官と呼ばれる専門職員による手仕事によって制作されています。当日は、国立印刷局の事業紹介から技法の説明、実技指導が行われたほか、工芸官が制作した彫刻画を中心とした資料が展示

されました。実技指導を除く講義・展示は全学に公開され、洋画専攻版画コースを中心に多くの学生が聴講しました。工芸官の緻密な技術と版画技法の繋がりを身をもって体験することで、版画やデザインを学ぶ学生たちのキャリアの可能性と選択肢を広げると共に、銀行券に対する国民の信頼を維持してきた工芸官の高い技術についての理解を深めました。

特別講義では、お札の肖像や文様

などを銅版に彫刻する銅版画の技法「エンゲレーヴィング」、金属の細密銅版を彫るために適した特殊な工具「ビュラン」を、動画と実演でご説明いただきました。そして、洋画専攻版画コースの学生6名がビュラン彫刻を用いて実際にイニシャルを彫る体験をしました。ビュランは本来、自分の手に合うように柄を削り出してカスタマイズされており、使いこなすには熟練を要する工具です。途中ビュラ

ンを砥ぐレクチャーを挟み、わずかな3時間での制作でしたが、体験している学生からは緻密な作業に全神経を集中する様子が伺えました。

工芸官の専門技術を身につけるには20年程度の鍛錬が必要とされ、テクノロジーが進む時代に、AIにはできない人間の手わざの最高峰を目の当たりにすることで、参加学生は大きな刺激を受ける貴重な時間となりました。

国立印刷局の工芸官による本学学生対象の特別講義が開催されました



07 | ユネスコ世界無形文化遺産 「八戸三社大祭」人形衣裳の修復を 染織文化資源研究所が行っています

青森県八戸市で行われているユネスコ世界無形文化遺産「八戸三社大祭」で引き廻される山車の人形衣裳の修復を、本学工芸専攻教授の大崎綾子先生をはじめ染織文化資源研究所が行っています。修復を終えた布地からは鮮やかな色彩が蘇り、また欠損部分などにおいては制作当時と同じ技法で部分的に複製を施すなど、過去の資料を基に制作当時の状態へと修復が進められています。今回修復された太公望の衣裳は2025年8月に開催される「八戸三社大祭」にてお披露目されます。



写真提供：津田塾大学

06 | 女子美術大学×津田塾大学 津田梅子の小袖修復プロジェクト

津田塾大学創立120周年記念事業として実施された「津田梅子の小袖修復プロジェクト」を本学工芸専攻教授で染織文化資源研究所代表の大崎綾子先生が担当しました。津田梅子が6歳で渡米した際に実際に着ていた小袖ということで特に貴重な資料ですが、退色や刺繍のほつれが目立っていました。創立120周年を機に、本格的な修復を目的として始まった本プロジェクトは、2022年度に保存処理・修復作業の全ての工程が完了し、その報告会が2023年11月14日に津田塾大学にて、津田塾大学学長の高橋裕子先生との対話形式で実施されました。



04 | 「NEW ENERGY」に短期大学部造形 学科デザインコーステキスタイル研究 室が展示発表を行いました

2024年2月15日～2月18日、クリエイティブの祭典「NEW ENERGY」にて、本学短期大学部造形学科デザインコーステキスタイルから、自然をテーマにしたバッグブランド「ReBloom」を出展しました。企業から出るいらなくなったハギレや糸、塗料を問題提起し、再利用を試みた取り組みで、学生自身が廃材で布をデザイン・加工をしています。バッグの形状は巾着で、作品の中には自分で撮った花畑の写真をシルクスクリーンで転写したり、素材を組み合わせてきた花で装飾したりするなど、個性が光りました。また、展示する台や小物も廃材を使用し、余ったハギレで台を装飾することで、再利用の可能性をより印象付けました。



03 | 女子美術大学×杉並区立神明中学校 『神明中学校校舎建て替え未来創造 プロジェクト～感謝祭イベント～』

杉並区立神明中学校の校舎建て替えから生まれた企画『神明中学校校舎建て替え未来創造プロジェクト』の一環として、校舎にプロジェクションマッピングを行う『感謝祭イベント』が本学メディア表現領域とのコラボレーションのもと行われました。有志の卒業生や実行委員会との対話を重ね、アニメーションワークショップや投影実験を実施。12月9日の本イベントにて、これまでの感謝をこめて校舎を送り出す「卒業式」を映し出し、多くの方々へ披露することができました。

08 | 荏崎北西小学校にて 特別授業を実施しました



本学は平成20年に荏崎大村美術館と締結した相互協力協定に発展する形で、平成26年11月に教育・文化の振興・発展、人材育成、まちづくり産業振興等を推進する目的の「連携協働に関する協定」を締結しました。この度、連携事業の一環として、荏崎市立荏崎北西小学校の1・2学年の児童と、本学美術教育専攻との図画工作の特別授業を実施いたしました。本学学生7人が教師となって、「わたしだけのひみつきち」をテーマに、段ボールを使つての立体作品制作を指導しました。参加児童は専用のカッターを使って、段ボールを切り分け、組み立てて、個性的な基地を作り上げました。参加した児童のみならず、美術教員を目指す本学学生にとっても良い学びの機会となりました。



パッケージデザインコンテストvol.4 最優秀賞作品
<https://www.seiwa-p.co.jp/shop/pages/contest-nyushousakuhin-vol4.aspx>



最優秀賞作品「ラボ先生」
<https://sites.google.com/view/miraikenkoulab-res/home>

05 | 女子美生限定公募コンペ 受賞レポート

本学では、学生の積極的な創作と研究活動を後押しすべく、様々な企業とのコラボレーションコンペを提供しています。今回、家庭用プリンターでラベルやパッケージ印刷が可能な無料Webアプリ「お手軽プリントWeb版」のデザインテンプレートを提供する株式会社清和との「パッケージデザインコンテストvol.4」と、名古屋大学が実施している“みらい健康

ラボ”(内閣府の進める科学技術プロジェクト「ムーンショット」の成果を利用した最先端の科学技術によって、解決可能な身近な問題の紹介・体験・参加を通して科学の発展に貢献できる研究室)のマスコットキャラクターを決めるコンテストが、本学学生限定で実施され、それぞれ優秀作品賞等が選出されました。



12 | JOSHIBI AIR (女子美アーティスト・イン・レジデンス) 活動レポート

学生が新たな創作活動・表現の場において国際的に活躍できるような経験・学びの場を提供する女子美アーティスト・イン・レジデンス (JOSHIBI AIR)。2023年10～12月期の招聘アーティストとして、本学卒業生の伊藤夏実さんと、オーストリアよりリサ・グロスコフさんとお招きし、アーティストトークや作品講評を実施するなど、本学学生と様々な交流を行いました。12月14日からは、活動拠点でもあるYAハイ

ツ高円寺1階スタジオにて、AIR活動の集大成である「オープンスタジオ-Embodied Echoes-」を開催し、オープニングレセプションやアーティストトークを実施しました。今後もJOSHIBI AIRは、国内外で活躍する女性アーティストを対象に、個人の学びや体験、学生・教職員間との交流を通して、教育・研究が活性化されることをめざします。



13 | 女子美クリエイティブ・ラボラトリー 学長対談 桃井かおり × 小倉文子

本学は1900年に建学されて以来、日本で唯一の〈女性のための美大〉として、女性の自己実現のための探索をしてきました。そしてこれからも探索者であり続けます。女子美クリエイティブ・ラボラトリー (女子美ラボ) では、当事者である在学生や活躍する卒業生、さらに社会とともに継続的に議論し考え、その議論や模索し続ける姿を発信していきます。この

度、女子美ラボの活動の一環として、本学の客員教授で俳優の桃井かおり先生と、小倉文子学長の特別対談を実施しました。12歳にして留学を経験した桃井先生が、異文化の中で自己を見つめ直し、本学建学の精神である女性の自立を体験の中から育成し、役者・監督そして作家としてのキャリアに影響を与えたのか、お話を伺いました。



後藤瑞穂「坂道で、I」 2023年 162×112cm キャンバス、油彩

10 | 「Idemitsu Art Award2023」にて、本学在学生が受賞

「Idemitsu Art Award2023 (旧シェル美術賞)」にて、本学大学院美術研究科美術専攻博士前期課程洋画研究領域の後藤瑞穂さんが学生特別賞を受賞しました。

【Idemitsu Art Award (旧シェル美術賞) とは】
Idemitsu Art Awardは、美術界に大きな影響を与えたシェル美術賞 (1956年～1981年)、および昭和シェル現代美術賞 (1996年～2001年) の合計31回の実績を経て、2003年に再開し、今年で52回目の開催となる公募展です。次世代を担う若手作家のための美術賞であり、創設当初より完全な公募制で実施しています。現在では「若手作家の登竜門」として、美術界で高い評価を得ています。



「Doomsday records」 朝井彩華:三菱地所賞

若手アーティストの発掘・育成を目的とした現代美術の展覧会「アートアワードトーキョー丸の内2024」にて、全国18校147点のノミネート作品の中から本学学生5名の作品が、厳選された展示作品20点に選ばれる快挙を達成。展示初日の4月25日に最終審査会および表彰式が行われ、展示作品の中からグランプリをはじめ各賞の受賞者が決定し、本学美術学科洋画専攻版画コース4年 (選出当時:2024年3月卒業)の朝井彩華さんが「三菱地所賞」を受賞しました。



11 | ドローイングセンターにて 2024年4月入学者対象『入学前デッサン講座』が開講されました

本学では、入学までの期間をより有意義に過ごしていただくために、総合型選抜・学校推薦型選抜 (指定校制) の合格者を対象に、『入学前デッサン講座』を開講しています。本講座は、相模原キャンパスにあるドローイングセンターにて、「卓上構成デッサン」「静物デッサン」の2種類のコースから選択して学ぶことができ、1日5時間程度、3日間かけて1枚のデッサンを仕上げていきます。イーゼルや鉛筆の使い方など基

礎から始まる本講座。光と陰の表現や立体感、観察力や細部への注意力を高めていき、最終日には講評会が実施されます。他の受講生と互いの作品を見て刺激を受けながら、一人一人に講師からの講評をいただきます。ドローイングセンターでは、今後も様々な講座を通じて、講師の指導や他の受講生の交流のもと、制作意欲を向上させる講座を開講していきます。



16 | 萩尾望都客員教授による特別講演が開催されました

3月10日に杉並キャンパスにて、本学客員教授で少女漫画家の萩尾望都先生による特別講演が開催されました。萩尾先生は2024年仏アングレーム国際漫画祭で特別栄誉賞受賞されており、フランスで行われた祭典や、授賞式に出席した様子を写真と共にご紹介いただきました。また、アングレーム市立美術館「萩尾望都ージャンルを超えて」展の図録をスクリーン

で鑑賞しました。ページを送りながら、フランスで編集された図録ならではのデザインにコメントをしつつ、作品の裏話や図書館に通い詰っていた幼少期の様子などを振り返りました。講演は、本学メディア表現領域教授の内山博子先生と対談形式で行われ、時折挟まれる萩尾先生のユーモアに会場が沸き、何度も拍手に包まれる楽しい講演会となりました。



17 | 東京アニメアワードフェスティバル2024にて本学学生作品が上映されました

3月8日～3月11日に国際的なアニメーション映画祭である「東京アニメアワードフェスティバル」が池袋で開催され、本学メディア表現領域の学生の作品が上映されました。Hareza池袋にて、東京アニメアワードフェスティバルの一環として、次世代を担う若手クリエイターの作品上映プログラム「YOUNG POWER 2024」が開催。メディア表現領域4年生小川奈穂さんの作品『かいもの』が上映され、ゲストの『アイカツ!』

シリーズなどの監督で昨年度のコンペティション部門長編アニメーションの審査員も務めた木村隆一氏と、各国の映画祭で30以上の賞を受賞したニンケ・ドゥーツ氏と作品について語り合いました。また、より多くの学生作品を紹介するための新企画として発足した「学生作品上映会」では、メディア表現領域3～4年生の計8作品がアニメイト池袋店にて上映されました。



14 | 宮田亮平先生による特別講演が開催されました

本学相模原キャンパスにて、金工作家の宮田亮平先生による特別講演会が1月18日に開催され、「ときめきのとき」をテーマに講演いただきました。宮田氏は東京藝術大学学長、文化庁長官を歴任されたほか、イルカの群れをモチーフにしたシュプリングシリーズを代表作に、数々の作品を国内外に発表されています。AIの技術を駆使した作品の実例をもと

に、アートとAIの可能性について紹介され、自分を貫くこと、固定概念を捨てることの大切さについてもお話いただきました。講演中には、学生たちのそばまで歩み寄り質問を投げかけ、積極的に対話をするようにお話されている姿が印象的でした。参加した学生にとっては、今後の制作の糧となるお話を伺うことのできた貴重な機会となりました。



15 | 本学客員教授 山崎直子先生 特別講義

1月24日に、相模原キャンパスにて本学客員教授で宇宙飛行士の山崎直子先生による特別講義が開催され、「宇宙」「人間」「アート」をテーマに講演いただきました。初めに、言葉の意味からそれぞれの関係性について、宇宙空間でのアート作品の実例をもとに解説いただき、実際に山崎先生が宇宙で体験した出来事や無重力空間での過ごし方について写真とともに

に紹介されました。最後には、これからの宇宙におけるアートの力や可能性についてお話いただきました。質疑応答では学生からの様々な質問に対し、質問者の近くまで歩み寄りお答えする姿が印象的でした。学生だけでなく多くの教職員が集まった本講演会。参加した学生にとっては、今後の制作の糧となるお話を伺うことのできた貴重な機会となりました。

ピーター・グリーンナウェイ特集上映 先行プレミア試写会

2月16日、本学相模原キャンパスにて『「はじめてのピーター・グリーンナウェイ」先行プレミア試写会』が実施されました。英国アート映画の先駆者として、世界中でカルト的人気を誇る鬼才ピーター・グリーンナウェイの特集上映『ピーター・グリーンナウェイ レトロスペクティブ 美を思った魔術師』が3月2日よりシアター・イメージ

フォーラムほか全国順次開催されることを記念し、フェルメールなど西洋絵画をモチーフとしたシーンや、アートをを用いた映像表現が数多く登場するグリーンナウェイ作品を鑑賞することで、本学学生がアート映画への理解をさらに深める機会として、全国公開に先駆けて一足先に本イベントが開催されました。今回は特集上映4

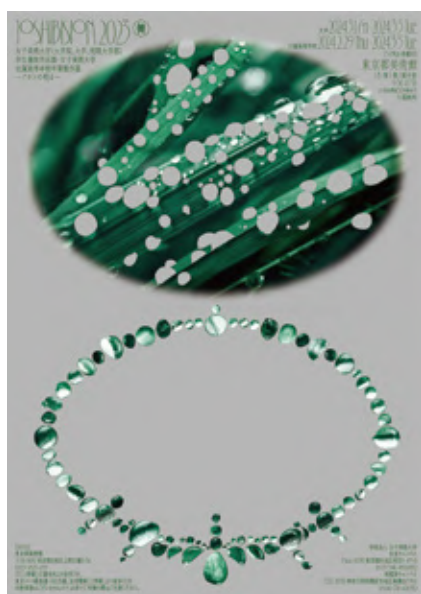
作品のうち、腐敗していく動物の死骸に囚われた双子の兄弟を描いたトラウマ級の衝撃作『ZOO』を鑑賞。また上映後には当日の特別ゲストとして、美術家・文筆家・ドラァグクイーンとして活動するヴィヴィアン佐藤さん、サントラ系アヴァンポップユニット「電影と少年CQ」のメンバーであり、映画やJ-POPにまつわる執筆、

ラジオパーソナリティとして活動するゆつきゅんさんをお招きし、はじめてのピーター・グリーンナウェイと題して、お二人による映画の魅力を解説いただきました。衝撃的ながらもアートの美しさが垣間見えるグリーンナウェイ作品を鑑賞することで、学生たちの視野を広げる大変貴重な機会となりました。

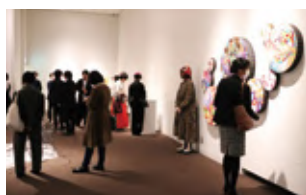


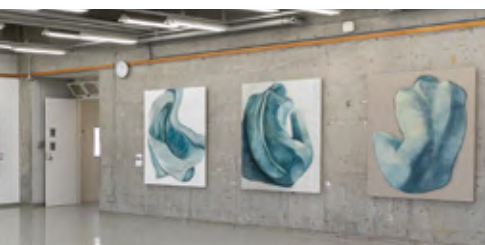
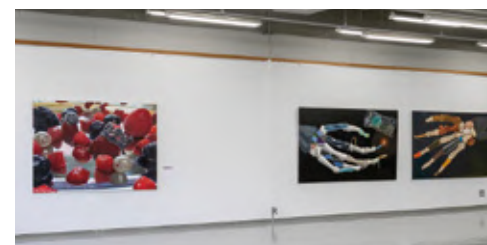
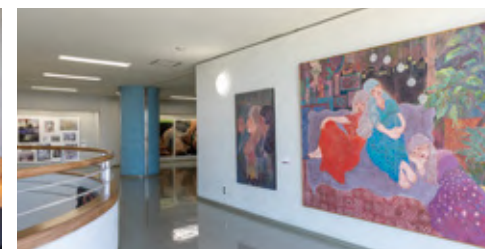
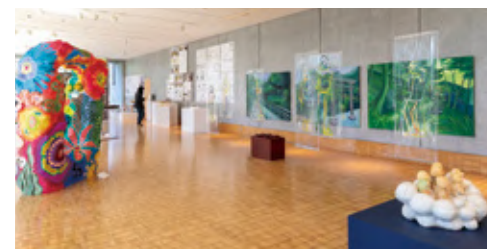
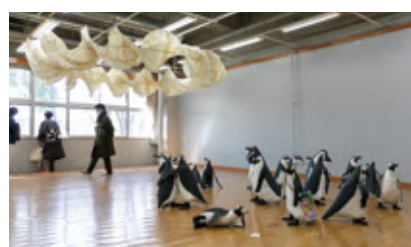
東京都美術館とオンラインにて開催、JOSHIBISION 2023

本学大学院芸術学部短期大学部の各研究室から選抜された作品、および付属高等学校の卒業制作を一同に展示する「JOSHIBISION 2023 アタシの明日」が2024年3月1日〜5日まで東京都美術館にて開催されました。今年で8回目の開催となる「JOSHIBISION」。このタイトルは「JOSHIBISION×EXHIBITION×VISIONをつなぐ創造語です。」「いまを生きる、等身大の学生たちのさまざまな視点が集まり、ともに未来を見つめていこう」というメッセージが込められています。2月29日には特別ゲストとして市原えつこさん（アーティスト）、金澤韻さん（現代美術キュレーター）、澁谷克彦さん（本学客員教授）、柴谷麻以さん（本展覧会メインビジュアル担当アートディレクター）をお招きし、オープニングイベントが開催されました。本展覧会のディレクターであるメディア表現領域准教授の首藤圭介先生が司会を務め、ゲスト賞の発表、授賞式、全体講評を行い、出展学生は有意義な時間を過ごしました。

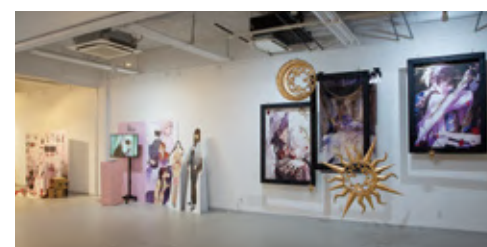
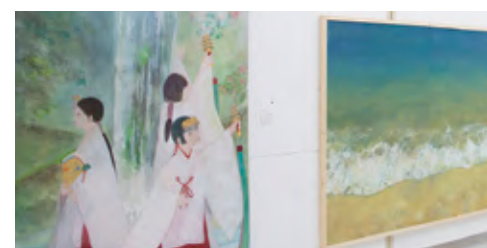
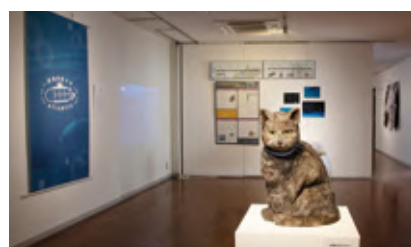
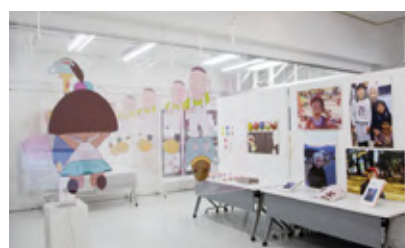
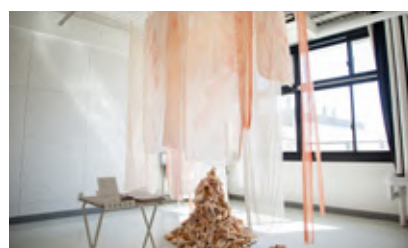
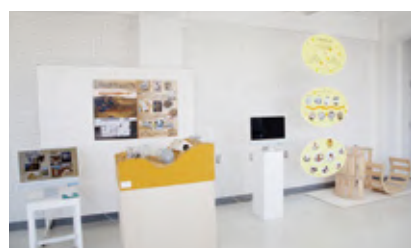
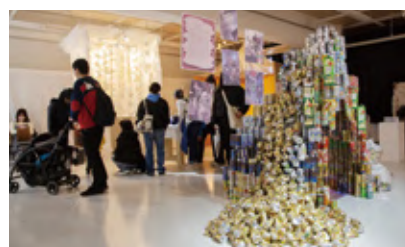
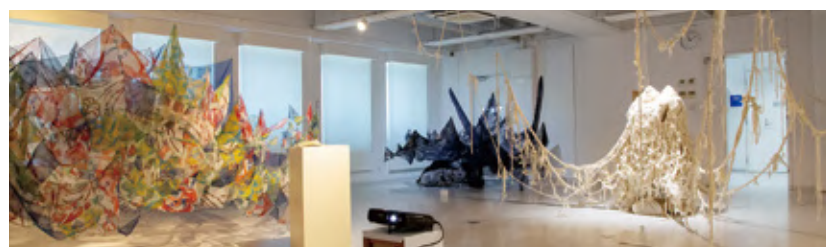


「JOSHIBISION2023 アタシの明日」
オンライン展示
<https://joshibision.com/>





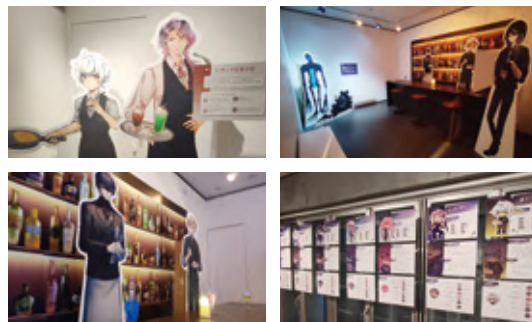
2023年度 卒業制作展／修了制作展 開催



本学大学院・芸術学部・短期大学の2023年度卒業制作展／修了制作展が杉並と相模原の両キャンパスにて行われました。芸術学部と短期大学部は2024年3月9日、11日、大学院の展示は3月9日、16日の期間で開催。4年間、あるいは2年間の学生生活の集大成として、それぞれの想いが詰まった力作が多く展示されました。

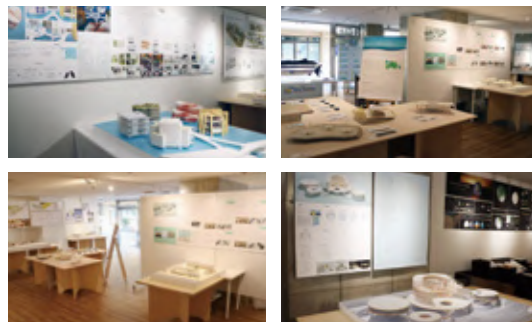
芸術学部 アート・デザイン表現学科
メディア表現領域
卒業制作有志展「宵待ちのメルコレディ」

会期：2月23日～2月25日
会場：Gallery NIW（東京都文京区）

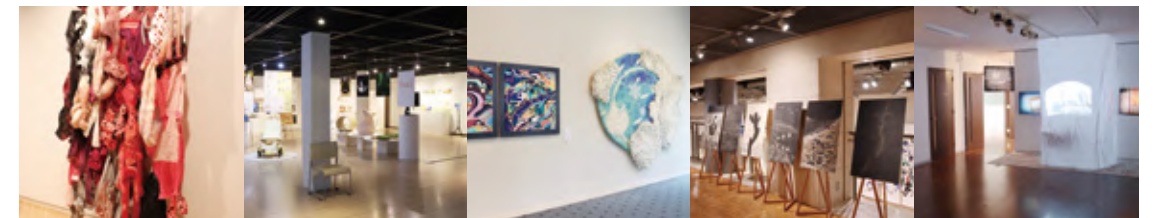


芸術学部 デザイン・工芸学科
環境デザイン専攻
卒業制作展「BOUQUET」

会期：2月9日～2月14日
会場：しろがねgallery（東京都三鷹市）



2023年度 学外卒業・修了制作展

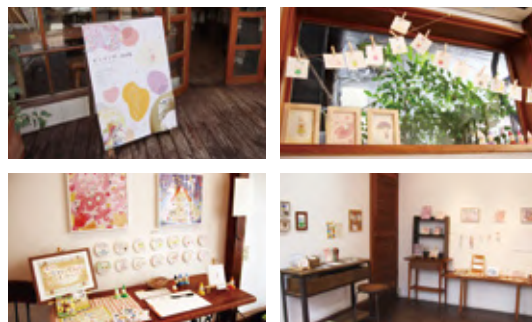


2024年1月から各学科・専攻・領域・コースごとに行われた学外での卒業・修了制作展の様子をご紹介します。

す。学生生活の集大成である卒業・修了制作を見るために、在学生や保護者、卒業生などが会場を訪れました。

芸術学部 アート・デザイン表現学科
ヒーリング表現領域
「ヒーリング★100% -わたしたちの4年間の軌跡-」

会期：3月7日～3月10日
会場：自由帳ギャラリー（東京都杉並区）



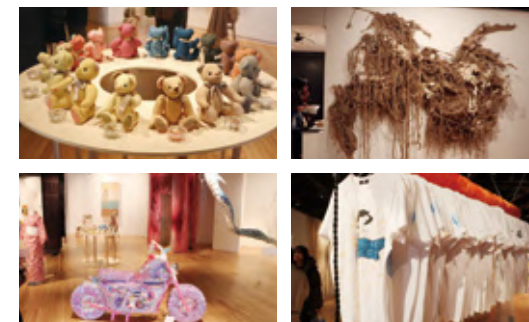
芸術学部 デザイン・工芸学科
プロダクトデザイン専攻
卒業制作展「SORAMOYO」

会期：2月14日～2月18日
会場：横浜赤レンガ倉庫（神奈川県横浜市）



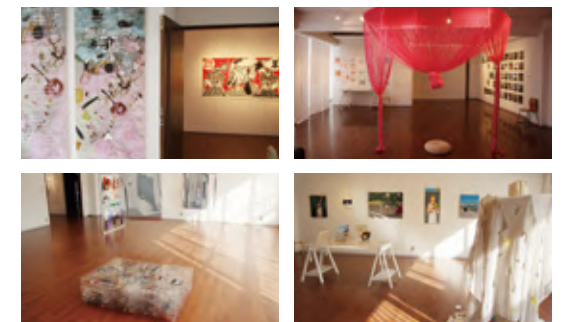
短期大学部 造形学科
デザインコース テキスタイル
卒業・修了制作学外展

会期：2月9日～2月12日
会場：AXIS GALLERY（東京都港区）



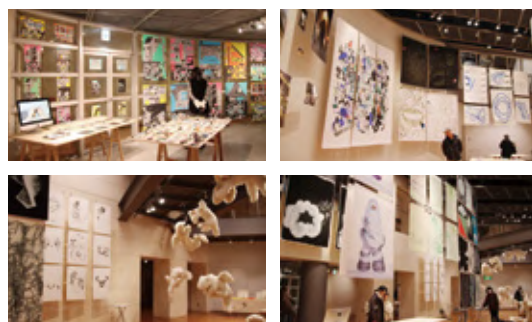
芸術学部 アート・デザイン表現学科
アートプロデュース表現領域
卒業制作・修了研究展「JOSHIBI AP Graduate & Degree Show 2023 -無法地帯の花園で、パフェをくらう-」

会期：1月12日～1月24日
会場：ガレリアニケ（東京都杉並区）



芸術学部 デザイン・工芸学科
ヴィジュアルデザイン専攻
卒業制作有志展「Bon voyage」

会期：3月23日～3月24日
会場：東京デザインセンター ガレリアホール（東京都品川区）



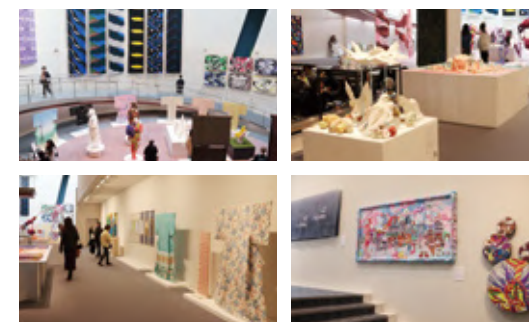
芸術学部 アート・デザイン表現学科
ファッションテキスタイル表現領域
有志卒業制作展「Tempera」

会期：2月16日～2月18日
会場：AXIS GALLERY（東京都港区）



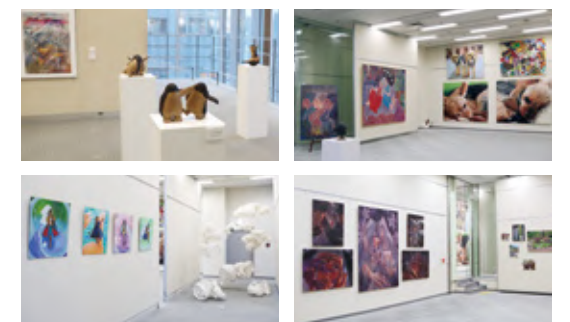
芸術学部 デザイン・工芸学科
工芸専攻
卒業・修了制作展2024 -流れの行く先-

会期：2月9日～2月13日
会場：Spiral Garden（東京都港区）

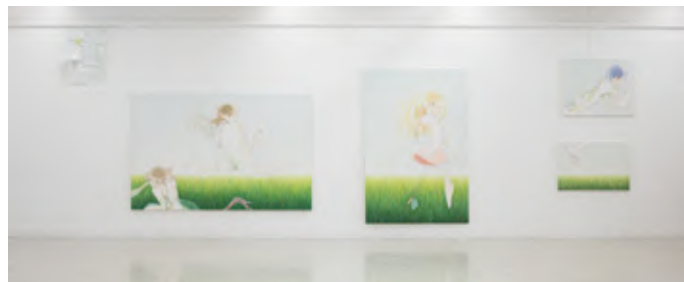


芸術学部 美術学科
美術教育専攻
第9期卒業制作展「結句」

会期：1月30日～2月4日
会場：町田市民ギャラリー（東京都町田市）



女子美術大学美術館賞



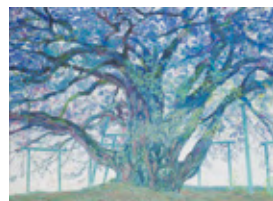
修了制作及び卒業制作が優秀な学生に授与される女子美術大学美術館奨励賞受賞者の中から1名に「女子美術大学美術館賞」が授与され、賞状と副賞が贈られました。また、選定作品は女子美術大学美術館に収蔵されます。

『みどりの海 (free park25-28)』 安齋 茉由
大学院美術研究科博士前期課程
美術専攻洋画研究領域
撮影：末正真礼生

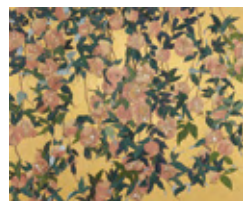
2023年度 特別賞

順天堂 佐藤志津・小川秀興賞

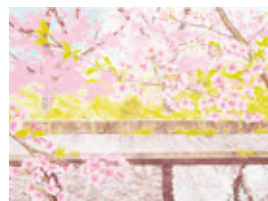
学校法人順天堂と本学は連携・協力に関する協定を締結しており、その一環として2016年度より優秀な卒業制作に対して「佐藤志津・小川秀興賞」を授与いただいております。本年度は以下の学生が受賞し、賞状と副賞が贈られました。選出された作品は順天堂大学内に1年間展示されます。



『はかりしれない』 菱沼結菜
芸術学部美術学科日本画専攻



『実りの音』 久保田 琳
大学院美術研究科美術専攻
博士前期課程日本画研究領域



『今日も流れる』 登野城陽南
芸術学部美術学科洋画専攻 (版画)

東京理科大学賞

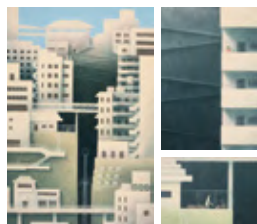
学校法人東京理科大学と本学は連携・協力に関する協定を締結しており、その一環として2015年度より優秀な卒業制作に対して「東京理科大学賞」を授与いただいております。本年度は以下の学生が受賞し、賞状と副賞が贈られました。選出された作品は東京理科大学内に1年間展示されます。

東京理科大学 学長賞



『もとやしき』 青島千佳
芸術学部美術学科日本画専攻

東京理科大学 坊っちゃん賞



『人の巣』 大野奈津子
芸術学部美術学科洋画専攻 (絵画)
撮影：末正真礼生

東京理科大学 マドンナ賞

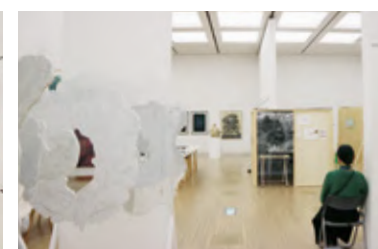
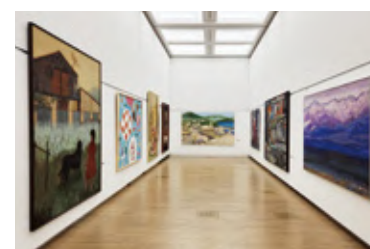
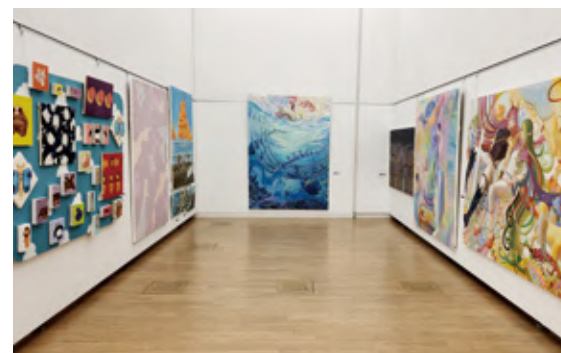


『過ぎる時間、歩む日々』 島野里緒
芸術学部美術学科洋画専攻 (版画)
撮影：川上弘美写真スタジオ (右)

令和5年度・第47回 東京五美術大学 連合卒業・修了制作展 開催

2024年2月23日～3月3日にて、東京五美術大学（武蔵野美術大学・多摩美術大学・東京造形大学・日本大学芸術学部・女子美術大学）の美術系学科による卒業・修了制作展「東京五美術大学 連合卒業・修了制作展」が国立新美術館に

で開催されました。五美大展合同企画として、各大学から選出された出品者5名とゲスト作家による対談企画『これからの舞台—国内外の美術活動』を開催。今年も五美術大学の個性が詰まった作品が一堂に会し、来場者を魅了しました。



JAM

2023年度 女子美術大学退職教員記念展

2024.1.10(水) - 1.27(土)

平戸貢児、浅野正博、内山博子

2023年度に退職される女子美術大学芸術学部実技系教員の展覧会。ガレリアニケからの巡回展でした。

2023年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展

2024.3.9(土) - 3.16(土)

2023年度に本学大学院美術研究科を修了する学生が制作した修了制作作品の展覧会で、相模原キャンパス(女子美アートミュージアム)では、洋画、日本画、版画、工芸(染・陶・ガラス)、立体芸術、ヴィジュアルデザイン、プロダクトデザイン、環境デザインの領域を専攻した学生の作品を紹介しました。

女子美ガレリアニケ

2023年度 女子美術大学退職教員記念展

2023.12.1(金) - 12.20(水)

平戸貢児、浅野正博、内山博子

2023年度に退職される女子美術大学芸術学部実技系教員の展覧会。女子美アートミュージアムへ巡回しました。

2023年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展

2024.3.9(土) - 3.16(土)

2023年度に本学大学院美術研究科を修了する学生が制作した修了制作作品の展覧会で、杉並キャンパス(女子美ガレリアニケ)ではメディア、ヒーリング、アートプロデュースの領域を専攻した学生の作品を紹介しました。

歴史資料展示室

2023年度 新収蔵資料展

2023.9.13(水) - 2024.3.15(金) 相模原校舎定点写真や付属幼稚園関係資料など、2022年度に収蔵した新資料を中心に展示公開しました。

JAM

女子美術大学美術館コレクション展

生誕110年 郷倉和子 創作の根底

2024.5.22(水) - 6.22(土)

女子美術専門学校出身の日本画家・郷倉和子の生誕110年を記念して、絵画作品やスケッチ、制作のための下図、画材などの資料をご紹介します。

版画五美大2024 ポートフォリオ版画集とアートブック展

2024.9.11(水) - 10.5(土)

女子美染織コレクション展Part12 ヨーロッパの染織品

2024.11.14(木) - 12.21(土)

2024年度 女子美術大学大学院

博士後期課程研究作品発表会

2025.2.12(水) - 2.18(火)

※開催は学位の申請状況により変更があります。

女子美ガレリアニケ

ニケキュレーターズセレクション#08 藤原宇希子 一落ち、ただよう粒ー

2024.5.15(水) - 6.18(火)

本学卒業の若手アーティストを紹介する展示。本年は、藤原宇希子の作品をご紹介します。

女子美スピリッツ2024 継岡リツ展

2024.10.17(木) - 11.27(水)

1962年に本学洋画科を卒業した継岡リツの作品をご紹介します。

2024年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展

2025.3.9(日) - 3.16(日) *3.13(木)、14(金) 休館

2024年度に大学院博士前期課程を修了する学生作品を展示します。

歴史資料展示室

私は創りたい 井江春代展 2024.4.3(水) - 7.13(土) *休室日 火・日・祝日

2023年度 女子美術大学大学院

博士後期課程研究作品発表会 一猫頭倒立の宇宙ー

2024.2.13(火) - 2.19(月)

2023年度 女子美術大学大学院博士後期課程美術研究領域(洋画) サ・ブンティの学位申請に係る研究作品発表会を開催しました。

【学内展】女子美染織コレクションと女子美の先達たち

2024.4.5(金) - 4.25(木)

新入生や在学生に向けて女子美染織コレクション・女子美術大学美術館コレクションの作品や過去の展覧会ポスターと施設の紹介を兼ねた展覧会を開催しました。

JOSHIBI AP Graduate & Degree Show 2023

2024.1.12(金) - 1.24(水)

アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域4年生と大学院博士前期課程2年生による卒業・修了制作作品展を開催しました。

【学内展】女子美ガレリアニケってどんなところ？

一企画展示の記録と展示室紹介ー

2024.4.5(金) - 4.22(月)

新入生や在学生に向けて過去の企画展ポスターや会場動画と施設の紹介を兼ねた展覧会を開催しました。

女子美術大学美術館コレクション展 近年の新収蔵作品

ー女子美術大学美術館賞受賞作品を中心に

2024.7.3(水) - 7.27(土)

女子美術大学美術館賞受賞作品を中心に、2023年にご恵贈いただいた女子美出身の日本画家・小関きみ子の作品や本学で教鞭をとられた教員にご寄贈いただいた作品を加えてご紹介いたします。

第44回 造形「さがみ風っ子展」

2024.10.25(金) - 10.27(日)

相模原市内小中学生の造形作品展です。

2024年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展

2025.3.9(日) - 3.16(日) *3.13(木)、14(金) 休館

2024年度に大学院博士前期課程を修了する学生作品を展示します。

女子美術大学短期大学部1年前期「基礎造形2024」展

2024.7.10(水) - 7.26(金)

短期大学部1年生が自由選択授業で制作した13講座の学生作品を展示します。

JOSHIBI AP Graduate & Degree Show 2024

2025.1.10(金) - 1.22(水)

アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域4年生と大学院博士前期課程2年生による卒業・修了制作作品展を開催します。

1944年に女子美術専門学校師範科日本画部を卒業し、絵本の分野で活躍した井江春代の在学中の作品・資料、人形・はり絵作品、絵本原画などを紹介します。

JAM 女子美アートミュージアム展覧会情報

展覧会報告 PICK UP

2023年度
女子美術大学退職教員記念展

2023.12.1(金) - 12.20(水)

杉並キャンパス(女子美ガレリアニケ・110周年記念ホール)

2024.1.10(水) - 1.27(土)

相模原キャンパス(女子美アートミュージアム)

2023年度 女子美術大学退職教員記念展では、本学芸術学部美術学科 立体アート専攻教授の平戸貢児先生、アート・デザイン表現学科 メディア表現領域教授の浅野正博先生、内山博子先生の実技系教員3名による作品展覧会を杉並・相模原キャンパス両校地の巡回展形式にて開催しました。

平戸貢児先生は、自身の学生時代の修了制作から、現在に至るまでの作品が一堂に会する展示でした。金属の特性である固さや強さの中にも、都市や自然を連想させる美しさや繊細さを含む作品群は、学生と真剣に向き合う先生の人柄をも連想させる温かい空間となりました。

浅野正博先生は、デジタルと芸術が融合するメディアアートという言葉が認知され始めた頃のCG作品から、カメラやセンサーなどのデジタル装置を使い、風景や人の動きをアートに変えるインタラクティブな表現作品までを紹介し、アートの多様性を体感する展示となりました。内山博子先生は、デジタル画像を色情報から立体生成する『デジタルモザイク』を再現。布に転写し、自らの手で縫うことで実態ある唯一の作品とした『デジタルスケッチ』や、学生や研究室とのプロジェクト・共同研究の成果を複数展示しました。さらに、ロビーでは1972年から続く女子美術大学のコンピュータ教育の軌跡を、貴重なパンチカード穿孔機やPC機材などとともに紹介しました。

長きにわたり教鞭をとり、後進の育成に携わるとともに、作家として創作活動に取り組んできた3名の先生方の幅広い活動の軌跡をご覧いただくことにより、本学の教育方針への理解がより一層深まる機会となりました。

撮影：大原一晃



平戸貢児先生 会場風景



浅野正博先生 会場風景



内山博子先生 会場風景



女子美術大学広報誌

発行 学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集 総務企画部広報グループ
監修担当 佐藤真澄・松山智一
デザイン協力 株式会社 Kitchen Sink.
印刷 株式会社 ヒーローズ
発行日 2024年6月18日
© 2024 学校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshi.ac.jp
URL <https://www.joshi.ac.jp/>